

令和7年度 岐阜県現代陶芸美術館協議会 議事要旨

■ 日時:令和7年7月2日(水) 14時00分～15時45分

■ 場所:岐阜県現代陶芸美術館 プロジェクトルーム

■ 出席者:

- 【委員】安藤(工)会長、安藤(貴)委員、小野寺委員、
長谷川委員、松原委員、渡部委員、川上委員、田代委員、
八代委員、柚木崎委員、小栗委員、水野委員
(欠席:加藤委員、高木委員、安藤(雅)委員)
- 【県】石崎館長、伊藤副館長事務代理、岡田学芸部長、
西岡係長、立花係長、花井係長、澤田課長補佐
三輪主任(文化伝承課)、林主任、松浦主事
(欠席:永井主事)

議事1:令和6年度 事業報告について

意見なし

議事2:令和7年度 事業計画について

意見なし

議事3:美術館の運営についての提言

(小野寺委員) 先日も伊藤慶二展の開会式に出席させていただいた。美術館としては来館者が多い方がよいと思うが、現代陶芸美術館としては必ずしもそれだけではないような気がしている。例えば展示物をじっくり見る、作品と対話をする、といった仕組みがしっかりできており、そのなかで想像を膨らませていくといったことを大事にされているんだなという風に見ている。つい来館者数に目が行きがちだが、じっくり見て、作品と対話できる仕掛けも大事ではないか。

気になった点としては、展覧会において、もう少し説明書きが多くていいのではないかといいところがあった。キャプションで背景を理解しながら、観ていくと、より一層楽しめるのではないか。バランスが難しいと思うが、いいところは非常に出ていると思う。あまり人数だけを追い求めすぎないでほしい。

(長谷川委員) 教育普及について、出前授業等とはどんな環境で作品が見られるのか、作る人にとってはどうか、など疑問な所があったが、資料に掲載されている出前授業の写真を拝見し、近くで作品を見ることができ、触れることができる作品もあったようで、こういった内容であればぜひ参加してみたいと思った。

(柚木崎委員) 美術館や博物館に行く際、解説をしっかりと聞いて、作品の展示意図が理解できると、知識も深まり、長時間滞在することができる。そこは学芸員の方が丁寧に説明してくれるかどうかという点がとても大きい。一人で鑑賞をしていると、解説を斜め読みしてしまうこともある。年に何回かだけでも、作品をじっくり解説するスペシャルツアーのようなものがあると良い。そうすることで企画の意図を理解していただいて帰っていただける。今時はヘッドホンでの音声ガイダンスや、QRコードを読み込むといった方法で作品解説を行うこともできる。学芸員がいなくとも、素通りしない見せ方があると良い。

また、セラミックパークMINOの事務局長としての立場から、セラミックパークMINOとのコラボを展開して行けると良いと考えている。美術館を見ていただいたあとにレストランで食事していただくためのアイデアなども、年に何度か、季節ごとに行えると良いと思っている。また提案を続けていきたい。美術館とセラミックパークMINOとの相乗効果で、来館者が二倍も三倍も楽しめるような仕掛けができると良い。

(小栗委員) 現館長が現代陶芸美術館に赴任された時、「愛好家を増やしたい」とおっしゃられたことを今でも覚えている。美術館がこれからの若い人を育てているという例を、東濃地区の図工美術の学校教育に関わる者の立場から三つ紹介したい。一つ目は高校生が進路選択で、美術の大学、専門学校、また学芸員を目指す例が増えてきたということ。高校との連携についてはM o M C A グローイングプ

プロジェクトの展覧会があった。土岐紅陵高校の校長と話す機会があり、もともと美術や、やきものに興味を持っている生徒が、美術館の展覧会に関わることで、改めて進路を見つめるためのいい機会となっているという意見をいただいた。二つ目はやきものに興味を持ち、専攻課程のある高校を選択したり、美術大学に進学したりして、教員になった生徒がいるという例。県内の小・中・特別支援学校の授業で作られた作品を一堂に会して美術館で展示する「大地の子供たち展」がいよいよ来年に迫ってきた。過去に、この展覧会で、作品を出品したことで、さらに自信や興味を持った生徒が、今年は美術の教員となって近くの学校に赴任した。また良い展覧会になるように協力したい。三つ目は、これからまた愛好家が増えそうな予感がしているということ。学校への出張授業について、教育普及の担当者が非常に頑張っている。今年は土岐市の美濃陶磁歴史館と連携し、出前授業を行うようだが、この試みは美術館同士の連携の賜物であると思っている。館長の思いを大切に、美術館が人を育てるきっかけになっているということは間違いではないと感じる。

(水野委員) 協議会の委員として参加することが決定してから、子供と二人で足を運んだ。保護者としての立場から、子供が何に興味を持つかを重要視しているが、M o M C A グローイングプロジェクトに子供が非常に興味を持った。小学生と中学生の子供がイラストを描いたりして、あのような展覧会に子供は興味をもつと思った。「こどもむかデー」というものがあることも知らなかった。せっかく良いものなので、もっと広めて行って欲しい。保護者ももっと知るべきである。

(八代委員) ここまで多くの事業を行っているということを知らなかった。教育普及事業については、小学生が対象のものが多いと常々感じている。中学校・高校となると催しも学校単位になりがちだが、学校に行けていない生徒もいる。そういった児童が一人で来られるようなきっかけみたいなものがないか。昼間に学校・塾に行くことができない生徒も、外に出たくないわけではない。そういった児童を受け入れるにはとてもいい場所であると感じる。ただし、子供が来館するためには保護者が車で送迎せざるを得ないのが現状である。何かそうではない方法を使って児童が美術館を見学する機会を作るこ

とができると面白い。

(小栗委員) 幼少期から興味を持っていただくことが、中学生・高校生となった際に繋がってくると思う。幼稚園くらいからこういう関わりが持てると、より関心が高まっていく。実際ここに来るというのはなかなか難しいが、親子での企画も増やしてみえるようなので、そういったことが力になれば良い。

(八代委員) やはり親子で参加するには親がその存在を知っていないといけない。そうすると気づいた親子しか来ることができないのではないか。ただ、そうではない児童もたくさんいる。そういった児童が、現代陶芸美術館に関わる機会があると良いと感じた。

(田代委員) 以前、古川前多治見市長が来館された際、陶芸の美術館であれば、協議会等の行事では、紙コップではなく、陶器でお茶を提供すべきであるという提言があった。基本的に元土岐郡の地域は、割合陶芸に馴染みがあり、基本的なことを知っている方も多いが、他地域の方々は、基礎的な事を知らない方が多い。こういった行事のタイミングでも、軽く説明を加えながら、お茶碗で提供ができると、より関心が高まるのではないか。世の中の大多数は陶磁器について知識がない、ということを改めて知ってほしい。美術館自体も、岐阜県の中ですら、周辺地域の方以外にはあまり知られていない。閉じられた地域の人間しか見に来られていないということを認識していただきたい。

(川上委員) すごく多くの事業を行っている中で、職員の人数は足りているのか。催物については、アイデアや準備を含め非常に時間がかかる。文化を普及させていくということは、人がいることで積み重なっていく。焼き物の産地である多治見にとって、現代陶芸美術館およびセラミックパークMINOは文化の要である。催事をどのように告知していくのかは難しい課題だと思うが、展覧会に一度来た方が、友人を連れて再度来館する、といったような、人と人の繋がりこそが一番セールスポイントになっていくと思う。

(松原委員) 東濃三市の中核にセラミックパークMINO及び現代陶芸美術館がある、ということを、何らかの形でアピールしてほしい。私自

身は生活のために焼き物をやってきたが、知れば知るほど奥が深い。三市の住民の方がやきものをもっと見たい、知りたいと思うようなきっかけの、起爆剤になるような展覧会を開催していただきたい。

昨今は産業陶磁器についての展覧会も非常に多くなっている。陶芸家の一品ものの作品についての展覧会も大いに結構だが、より裾野の広い、産業陶磁器や、陶磁器産業に寄与した人物についての展覧会も、開催していただきたい。

(安藤委員) 多治見市は、子育てに関してすごく力をいれている。幼少期は多くの児童が芸術に対する関心・才能を持っているが、小中高と上がるにつれ、関心が薄まり、そういった芸術分野に進む方は一部のみになる。子どもの頃の豊かな想像力に刺激を与えて、芸術に触れあう時間を作れるような教育が大事だと思う。また、美術館で、学校の児童が展示室で自由に作品を観察しながら模写できるような、美術館での対応があると良いと思う。

リサ・ラーソン展については、学生を連れて何度か足を運ばせていただき、ミュージアムショップの売れ行きも大変好調であったと伺っている。美術館におけるミュージアムショップの存在はすごく大きい。特に女性や子供はグッズに目を引かれるので、単なる関連商品を置くだけではなく、どういったものを観覧者が好むのか、どうすれば美術館に足を運んでもらえるのか、といったことも考えていただきたい。

(渡部委員) 今回初めて来館した。先週まで津市に勤めており、三重県の美術館・博物館の協議会に参加したこともあるが、こんなに立派な陶芸専門の美術館はなかなかない。公共施設であればたくさんの人に利用されるべきだが、美術館が開館して約20年で、年間の最高の来館者数が約86,000人というのは、多いとは言い難い。交通アクセスの問題もあるが、リサ・ラーソン展においても、愛知県など県外からの来館者も多かったと聞く。県内・県外問わずPRして一人でも多くの人に来館してもらうのが、公共施設の務めではないか。PRについて、美術館のSNSを拝見したところ、Facebook、Instagramが約3000人、Xが約12,000人。これも多いとは言いづらい。若い人はあまり新聞を読まない。中日新聞社は美術館と展覧会も共催しており、今後もできる限りの協力は行っていくつもりだが、SNSでの創意工夫が必要ではないか。

(安藤会長) 皆さんからいただいた意見は、今後の美術館運営に活かしていきたいと思います。これで議事を終了します。ありがとうございました。